

無定着の思想——深沢七郎

菅

邦  
男

## 〔深沢七郎略年譜〕

大正三年（一九一四）一月二十九日、山梨県八代郡石和町に生まる。家業は印刷業、男ばかり五人兄弟の四男である。幼い頃患った角膜炎がもとで小学校時代に右眼失明。中学卒業後薬屋やパン屋に住み込んだが一ヶ月ももたず、以後肋膜炎にかかったこともあって定職に就かず、流浪の生活。戦時に徴兵保険会社、報国砂鉄精鍊株式会社等に一時勤めたのみである。その間本格的にギターを習い、昭和十四年には丸ノ内明治生命講堂で第一回のギターリサイタルを開いている。戦後は闇屋をやったり、ジミー川上という芸名でドサまわりのバンドに入ったり行商をしながら各地を転々としていたが、二十七年東京YMCAでギターリサイタルを開いたのを機にストリップ専門の日劇小劇場（日劇ミュージックホール）でギターを弾くようになる。三十一年、「櫛山節考」で第一回中央公論社新人賞受賞。三十三年、「笛吹川」を中央公論社より刊行。三十五年、「風流夢譚」を「中央公論」に発表し、皇室を侮辱したものとして右翼からの攻撃が相つき、翌年一月、社長宅が襲われ、夫人が重傷、女中さんが死亡という事件を引き起す。いわゆる嶋中事件である。この後、しばらく各地を流浪。四十年、埼玉県にラブミー農場を開く。四十六年、東京都墨田区に今川焼き一コ二十五円の店、「夢屋」を開店。ラブミー農場手製のミソも発売し、好評を博す。翌年には、「夢屋」の三階に住む女性が上から水を捨て、それがお客様にかかり、謝りもしないので怒った深沢がポカリとやり、書類送検されている。四十九年頃から

ジャーナリズムの表面から姿を消し、翌年、狭心症、心臓ぜんそくで大宮日赤病院へ数度の入院、持病の心臓病に苦しめられながら、ラブミー農場にこもりつきりになる。五年、「みちのくの人形たち」を刊行。

作品に、「楯山節考」「東北の神武たち」「笛吹川」「東京のプリンスたち」「風流夢譚」「月のアペニン山」「千秋樂」「甲州子守唄」「かげろう囃子」「朝鮮風小夜樂」「揺れる家」「三つのエチュード」「絢爛の椅子」「南京小僧」「庶民烈伝」「盆栽老人とその周辺」「みちのくの人形たち」等がある。その他に、評論、隨筆集、対談集がある。

無定着とは、一定の土地に定着しないことである。それは即ち、一定の社会集団に帰属しないことを意味する。

実生活において流浪することの多かった深沢七郎の作品には、この社会集団と個体との絡みの問題が色濃く内在している。

ここでは、この社会集団と個体の絡みの問題を取り扱いながら、そこに内在する「無定着の思想」とも題すべき深沢七郎の思想を探つて行くことにしたい。

# (一)

正宗白鳥が「人生永遠の書」とまで評した「樺山節考」は、姥捨てを取り扱った作品として有名である。

これは深沢のデビュー作であり、第一回中央公論新人賞を受けたものであるが、この「樺山節考」において集団は、「樺山詣り」という村の掟として、象徴化されて出て来る。

即ち、七十歳になつたら、誰でも一切の条件なしに樺山へ行かなければならぬという姥捨ての掟である。(樺山は年寄りを捨てる山の名である)

村の掟とは、言うまでもなく、「村」という小集団の意志の表れであり、その集団が生きて行くためのエゴの別名でもある。つまり、年寄りを捨てても自分たちの生を確保するという個体の意志(エゴ)の集約化されたものであり、掟となることによつて、すべての人々にそれらの行為を絶対的に強いることになる性質のものである。

それは、親を捨てるなどを苦痛に思つてゐる人々にとつても、例外ではない。

例えば、「樺山節考」には主人公おりんと息子辰平夫婦の間には流れるような愛の交流が見られる。樺山詣りが近づいて涙を流す辰平、それを逆に力づける母親のおりん、ここにはまごうとのない母子愛がある。

そして、特に最後の場面、辰平がおりんを背板に乗せて山へ登つて行き、頂上に降ろして後ろ髪を引かれながらも、おりんに促されてようやく山を下り始めるあの場面である。

おりんは筵の上にすくっと立つた。両手を握つて胸にあてて、両手の肘を左右に開いて、じつと下を見つめていた。口を結んで不動の形である。帯の代りに繩をしめていた。辰平は身動きもしないでいるおりんの顔を眺めた。おりんの顔は家にいる時とは違つた顔つきになつてゐるのに気がついた。その時には死人の相が現われていたのである。

おりんは手を延して辰平の手を握つた。そして辰平の身体を今来た方に向かせた。辰平は身体中が熱くなつて湯の中に入つてゐるようにあぶら汗でびっしょりだつた。頭の上からは湯気が立つていた。

おりんの手は辰平の手を堅く握りしめた。それから辰平の背をどーんと押した。

辰平は歩み出したのである。うしろを振り向いてはならない山の誓いに従つて歩き出したのである。

十歩ばかり行つて辰平はおりんの乗つていないうしろの背板を天に突き出して大粒の涙をぼろぼろと落した。酔っぱらいのようによろよろと下つて行つた。少し下つて行つて辰平は死骸につまずいて転んだ。その横の死人の、もう肉も落ちて灰色の骨がのぞいている顔のところに

手をついてしまった。起きようとしてその死人の顔を見ると細い首に縄が巻きつけてあるのを見たのだった。それを見ると辰平は首をうなだれた。「俺にはそんな勇気はない」とつぶやいた。そして又、山を下って行つた。櫛山の中程まで降りて来た時だった。辰平の目の前に白いものが映つたのである。立止まつて目の前を見つめた。櫛の木の間に白い粉が舞つているのだ。

雪だつた。辰平は、

「あっ！」

と声を上げた。そして雪を見つめた。雪は乱れて濃くなつて降つてきた。ふだんおりんが、「わしが山へ行く時アきつと雪が降るぞ」と力んでいたその通りになつたのである。辰平は猛然と足を返して山を登り出した。山の撻を守らなければならぬ誓いも吹きとんでもしまつたのである。雪が降つてきたことをおりんに知らせようとしたのである。知らせようというより雪が降つて來た！と話し合いたかったのである。本当に雪が降つたなあ！と、せめて一言だけ云いたかったのである。辰平はましらのように禁断の山道を登つて行つた。

おりんのいる岩のところまで行つた時には雪は地面をすつかり白くかくしていた。岩のかげにかくれておりんの様子を窺つた。お山まいりの誓いを破つて後をふり向いたばかりでなく、こんなところまで引き返してしまい、物を言つてはならない誓いまで破ろうとするのである。罪悪を犯しているのと同じことである。だが「きつと雪が降るぞ」と云つた通りに雪が降つて

きたのだ。これだけは一言でいいから云いたかった。

辰平はそつと岩かげから顔を出した。そこには目の前におりんが坐っていた。背から顔に筵を負うようにして雪を防いでいるが、前髪にも、胸にも、膝にも雪が積っていて、白狐のよう

に一点を見つめながら念佛を称えていた。辰平は大きな声で、

「おつかあ、雪が降ってきたよう」

おりんは静かに手を出して辰平の方に振った。それは帰れ帰れと云っているようである。

「おつかあ、寒いだろうなあ」

おりんは頭を何回も横に振った。その時、辰平はあたりにからすが一ぴきもいなくなつていてるのに気がついた。雪が降ってきたから里の方へでも飛んで行つたか、巣の中にでも入つてしまつたのだろうと思った。雪が降ってきてよかつた。それに寒い山の風に吹かれているより雪の中に閉ざされている方が寒くないかも知れない、そしてこのまま、おつかあは眠つてしまうだろうと思つた。

「おつかあ、雪が降つて運がいいなあ」

そのあとから

「山へ行く日に」

と歌の文句をつけ加えた。

おりんは頭を上下に動かして頷きながら、辰平の声のする方に手を出して帰れ帰れと振った。

辰平は、

「おっかあ、ふんとに雪が降ったなア」

と叫び終ると脱兎のように駆けて山を降った。

引用が長くなつたが、この雪の場面は圧巻である。構成も巧みである。雪の中におりんを立て、生→死（俗→聖）という構図を作り出している。即ち、死地におもむこうとするおりんを雪で淨めることによって、その死を美しいものとし、死地を聖地としてイメージさせるのである。雪に埋もれたおりんは、俗から聖なる世界へと移行しようとしているのである。

それはともかくとして、この場面にも見られるように、「本当に雪が降ったなあ！」と一こと言いたがために捷を破つて引き返して来る辰平は、確かに優しい息子である。

しかし、本来優しい息子である辰平も、仕方なしにではあるが、結局母親を捨てるのである。そうしなければ、おりんは村中の笑い者になるだろうし、辰平にしても村人からどんな仕うちを受けるか知れないるのである。仕方なく、それは文字通りどうしようもなく仕方のない行為なのであるが、それでもやはり、後に生きる人々（子や孫たち）のエゴであり、年寄りを犠牲にして自分たちの生を確保するエゴイティックな行為であることに、変わりはないのである。捷は、そ

れらの行為を絶対的に強いるものなのである。

しかし、こうした撻も、逆に言えば、年寄りを捨てる側の人間にとつて、唯一の救いであったことも事実である。

年寄りを捨ててでも生き抜くという個体の意志が、「村の撻」という集団の意志として抽象化されることによって、個体の集りである集団は「撻だから仕方がない」という形で個体の気持ちを楽にさせてくれるのである。個人レベルで年寄りを捨てれば悪であるが、集団で撻としてやれば善というわけである。個体によって作られたものも、集団の意志（撻）という形に抽象化されることによって、各個体を越えて一人歩きするようになるのである。それは得てして、個体の意識を越えた強大な力を持つ不可思議な存在と化す。

辰平にとって樺山詣りはそうした村の撻であったが故に、自分を初めとして後に残る村人のエゴを「撻だから仕方がない」という形ですり代えることも出来たし、撻であるが故に「いづれは自分たちも行くのだから」という形で気を落ち着けることも出来たはずである。「子どもや孫が生きて行くために、やがては自分も山に行くのだから」という気持ちは、辰平を初めとする心優しい人々の唯一の救いだったと言って良い。そうした人々にとつては、自分が将来山へ行くことを代償として姥捨てを正当化する以外に、自分を納得させる道は無いのである。

一方、捨てられる側にとつても、撻は彼らの行為いかんによつては名誉さえ与えてくれる存在

なのである。臆することなく山へ行つたおりんのような人々にとつて、それは「村のために」という、人生の終焉にあたつて晴れの舞台を与えてくれる存在でもあつたのである。

歯の丈夫なおりんが村人に「その歯じゃア、どんなものでも困らんna。松つかさでも屁つぴり豆でも、あますものはねえら」と悪口を言われて、歯を折ろうとする場面がある。年をとつても歯が丈夫なのは、よけいに飯を食うということでこの村では非難されるべきことなのである。

「おりんは誰も見ていないのを見すますと火打石を握つた。口を開いて上下の前歯を火打石でガッガッと叩いた。丈夫な歯を叩いてこわそうとするのだった。ガンガンと脳天に響いて嫌な痛さである。だが我慢してつづけて叩けばいつかは歯が欠けるだろうと思った。欠けるのが楽しみにもなつていたので、此の頃は叩いた痛さも気持がよいぐらいにさえ思えるのだった。」

「……いい人だと云われてうれしくなつてしまつたおりんは、ここで一世一代の勇気と力を出したのである。目をつむつて石臼のかどにがーんと歯をぶつけた。口が飛んでいつてしまつたと思つたほどしごれた。そうしたら口の中があたたかくなつたような甘い味がしてきた。歯が口の中一ぱい転がつているような気がした。おりんは口から血がこぼれるのを手で押えてチヨロチヨロ川へ行つて口を洗つた。歯が二本欠けて口の中から出てきた。」

衰えない歯をわざと臼の角にぶつけて折るという、その凄みに比して少々滑稽な動機にも、死を恐れず、堂々と山へ行くことを誇るべき行為だと思う心にも、それが村のためになるのだという自己犠牲意識が根底にあつたからこそその行為である。そして、それから来る見栄である。村という集団のためになることこそ、最大の美德という意識である。

「撻」は、捨てる側にも捨てられる側にも「村のために」という大義名分を用意しておいてくれるわけである。

しかし、両者に精神的な逃げ道を用意しておいてくれる撻（集団）も、自己の意に添わない者に対しても強大な力をもって抑えにかかることになる。集団のエゴは個体のエゴの絶対的な排除を要求するのである。

例えれば、恐れ逃げまどった「錢屋の又やん」は醜態を晒したあげく、息子に荒縄で手荒く縛られ、頂上に着かないうちに途中の谷にけ落されてしまうのである。

誰もいらないはずの七谷の上のところまで降つて来たとき、錢屋の伴が雪の中で背板を肩から降ろそうとしているのが目に入った。背板には又やんが乗つていた。荒縄で罪人のように縛られている。辰平は「やッ！」と思わず云つて立止まつた。錢屋の伴は又やんを七谷から落そうとしたからだつた。四つの山に囲まれて、どのくらい深いかわからないような地獄の谷に又や

んを落そうとするのを辰平は目の下に見てるのである。——中略——又やんは昨夜は逃げたのだが今日は雁字搦がんじがまみに縛られていた。芋俵のように、生きている者ではないように、ごろっと転がされた。伴はそれを手で押して転げ落そうとしたのである。だが又やんは縄の間から僅かに自由になる指で伴の襟を必死に摑んですがりついていた。伴はその指を払いのけようとした。が又やんのもう一方の手の指は伴の肩のところを摑んでしまった。又やんの足の先の方は危く谷に落ちかかっていた。又やんと伴は辰平の方から見ていると無言で戯れているかのようになっていた。そのうちに伴が足をあげて又やんの腹をぽーんと蹴とばすと、又やんの頭は谷に向ってあおむきにひっくり返って毬のように二回転するとすぐ横倒しになつてごろごろと急な傾斜を転がり落ちていった。

辰平は谷の底の方を覗こうとしたその時、谷底から竜巻のように、むくむくと黒煙りが上つてくるようにからすの大群が舞い上ってきた。湧き上るように舞い上ってきたのである。

「谷底から竜巻のように、むくむくと黒煙りが上つてくるように」舞い上つてくる鴉の大群は、逃げようとした又やんへの懲罰を思わせる。その光景の凄じさと惨酷さは、意にさからつた個体への集団の怒りの反映である。

この錢屋の伴は、恐らく若き日の父親、即ち又やんの姿である。自分が生きるために積極的に

親を殺そうとする伴はエゴの露骨な形であり、それ故に犠牲という認識も無ければ、死ぬことへの誇りも無いわけである。そこにあるのは自己犠牲という文化ではなく、まさにエゴの表出のみである。親子共にそうであるから、櫛山詣りの儀式である振舞酒も出さないのである。

山へ行く前の夜、振舞酒を出すのであるが、招待される人は山へ行つて来た人達だけに限られていた。その人達は酒を御馳走になりながら山へ行くのに必要な事を教示するのである。それは説明するのであるが誓いをさせられるのであつた。教示をするにも仁義のような作法があるて、一人が一つずつ教示するのである。

これが振舞酒であるが、おりんがこの時に備えて白萩様（米）のどぶろくを一斗近くも用意し、「わしが山へ行く時は祭りのときと同じくらいの振舞いが出来るぞ、白萩様も、椎茸も、やまべの乾したのも家中の者が腹一杯たべられるだけ別に用意してあるのだ。村の人に出す白萩様のどぶろくも薄めては作つたが一斗近くもこしらえておいたのを、今は誰も知らないだろう、わしが山へ行つたそのあした、家中のものが、きっと、とびついてうまがつて食うことだろう。その時になつて『おばあやんがこんなに！』ってびっくりするだろう。その時はわしは山へ行つて、新らしい蓮の上に、きれいな根性で坐っているのだ。」と常々考えていたのに対し、又やんには一

滴の貯えもなく、その息子は樺山詣りにおいて途中の谷から親をけ落とすという最も安易な方法をとつたのである。

こうして捷は、利害の一致故に殺す側の個体（錢屋の息子）のエゴは許すが、殺される側（又やん）のそれは絶対に許さないのである。自らの存在を少しでも揺るがすような行為を、この抽象的な生き物は絶対に許しはしないのである。例え、その集団の構成者に対してもである。

十二人の家族をかかえ、一家を養い切れず盗みを働いた雨屋などは、「樺山さんに謝る」と称して食料を全部没収されたうえに、夜逃げせざるを得なくなるのである。

盜人は雨屋の亭主であった。隣りの焼松の家に忍びこんで豆のかますを盗み出したところを、焼松の家中の者に袋だたきにされたのであった。

食料を盗むことは村では極悪人であった。最も重い制裁である「樺山さんに謝る」ということをされるのである。その家の食料を奪い取って、みんなで分け合ってしまう制裁である。分配を貰う人は必ず喧嘩支度で馳けつけなければ貰うことが出来ないのである。——中略——それから「家探し」ということをされるのである。屈強な男達が雨屋の家の中を荒らして食べられるという食べ物を表に投げ出してしまったのである。

こうして「それから三日目の夜おそらく大勢の足音が乱れ勝ちにおりんの家の前を裏山の方へ通つていった。雨屋の一家が村から居なくなってしまったのが村中へ知れわたったのは、その翌日のことだった。『もう雨屋のことは云うではねえぞ』と村中の申し合せがあつて、誰も噂をしなくなつた」ということになるのである。「村の人達が殺氣だっている様子では今夜あたりから雨屋の誰かが一人ずつ減つてゆくじゃアないかと思うと、何んとなく身がひきしまつてしまつた」という雰囲気に逃げ出してしまつたのである。

実質は追い出されたのである。冬を迎えるとしている山へ、十二人もの人数で食料も持たず逃げてみたところで結果は同じなのである。それは当然、死を意味する。雨屋一家を死に追いやる行為よりも、食料を盗む行為の方が大罪なのである。

では、この集団がもし個体の人間としての情を許し、それによつて動いた場合はどうなるのだろうか。即ち、捷が自分の意に背く行為を許容した場合である。

## (二)

「三つのエチュード」という一連の作品の中に、「南京小僧」という短編がある。同じく貧しい社会における余計者という設定である。主人公「ワシ」(私)の住んでいる島は、子どもを南京

袋に押し込んで売り飛ばしてしまうほどの貧乏な島である。従って、五体満足でない人間が生きる余地など、まったく無い世界である。

「ワシ」の孫の政次は、生まれつき片足が悪いのである。政次が生まれた時、父親の為吉は大きくなってしまふことも出来ず稼がすことも出来ないから殺すように言ったのだが、「ワシ」は赤ん坊の政次を為吉に渡そうとして頬っぺたをつかまれ、その愛らしさに捨てることが出来なくなつたのである。「ワシ」はつい情に流され、貧乏な島の暗黙の撻を破つてしまつたのである。その結果、「何年もメシを食わせて」大きくしたあげく、それまで世話をしていた兄の秀雄が売られて行つたあと誰も世話をする者がいなくなり、どうしようもなくなった「ワシ」は政次を海に沈めて殺してしまうのである。そしてまた、自らも海に沈んで行つたのである。

「何年もメシを食わせて」大きくしても、売ることも働かすことも出来ず、結局殺してしまうのだから、そういう意味ではまったくの無駄であり、しかも情に流された報いとして自らの命をも絶たねばならなかつたのである。五体満足でない者は、ボコ（赤ん坊）のうちに始末してしまうべきだったのである。「桔山節考」にも見られるように、こうした世界ではボコは人間ではないのである。集団にとって人間とは、その集団を構成し、かつ維持し得る者のことであつて、それ以外ではない。役に立つ者だけが人間であり、それ以外は余計者なのである。

集団（撻）は情に流された「ワシ」を抹殺したわけだが、集団が情を許容する時、その集団は

結局「ワシ」と同じ運命を辿<sup>たど</sup>らざるを得ないのである。それ故にこそ、集団のエゴは絶対的な権力を持つ権として君臨しなければならないのである。

これらの作品は、いずれも極限状況下での話であるが、深沢七郎には、集団とは本質的にこのようなものだという認識があるのである。「楨山節考」の社会は極めて閉鎖的であり、そこでは社会集団（村）を破壊しない者、維持し得る者のみが構成者であり、人間として認められ、その他の者は余計者であった。

しかし、その社会の順応者のみを優遇し、他を余計者として圧迫するという構図は、程度の差こそあれ、現代の競争社会においても同じである。こうした社会（集団）では、集団の発展に役立つことが最上の美德とされ、人の上に立ち、人を使用することが出世であり、そのため人々は自己を抑え、自分の欲求を犠牲にして日々努力するわけである。そして諸々の約束や規則に縛られ、「落ちこぼれ」などという言葉が端的に示すように、上昇のみが常に善だとされる社会にあって、それが出来ない者は苦悩し、絶望し、果ては病み、自殺したりするのである。

ここに、深沢七郎の「定着は悪だ」という考え方が出て來るのである。深沢七郎の価値観は、前述したような常識的な価値観とはまったく反対の側にある。後述するように、深沢は、「エリートは敵だ、したいことだけをしろ、何のために生きるかなんて考えるな」と言うのである。

この言葉は無論社会集団への帰属の拒否を意味している。即ち、個体の主張であり、個体の尊

重であり、定着の拒否である。無定着の思想である。

定着するからこそ集団が生じるのである。それが流動的なもの、例えば「千秋樂」という作品に描かれているような一時的な集団、各地から芸人が集まり公演が終ればまた散って行くというようなものであれば別だが、一定の場に定着するとなると、長い間に淀みが出来、集団性（規則）が強化され、個体を縛りつけるような存在と化して行く。個体の欲と欲がぶつかり合い、やがてその中に人の上に立つ者が現れ、いつしか支配する者とされる者とが生じ、その典型として「権力」が出現して来るのである。

このように、欲の最たるものであり集団の典型である権力と権力のぶつかり合いを庶民の側にスポットをあてて描いたのが、もう一つの代表作「笛吹川」である。

### (三)

「笛吹川」は、信虎から信玄、勝頼までの甲州武田家の興亡を描いたものである。このような素材の場合、権力者・支配者の側にスポットをあてて描かれるのが普通である。武田信玄と言えば、猛将・智将であり、「風林火山」の旗印をなびかせ、上杉謙信との川中島での戦い、あるいは若き日の徳川家康との戦いなど、子ども時代に読んだ伝記ものに描かれた信玄像がすぐに浮かんで来る。

るのであるが、これは「歴史書」自体がいつも権力者支配者側を中心に展開しているためである。「日本の歴史」という場合、せんじつめればそこに展開されているのは各時代の支配者たちの権力闘争以外の何ものでもない。

しかし「笛吹川」ではそれが逆転し、江藤淳も言つてゐるよ<sup>(註)</sup>うに武田一族は「お屋形様」という総称で影絵のように描かれ、百姓たちとは隔絶した存在として扱われている。

ところが、百姓たちにとつては遠く影絵のような存在であるこの「お屋形様」は、絶対的な力で百姓たちを支配し、否応なく戦さに巻き込んで行くのである。それは極めてエゴイステイックな天災といつてもよいような力である。息子たちが戦さに行かないことを願いながら、結局「お屋形様」の戦さに巻き込まれ、息子・娘・それに妻までも失い、一人残された定平が家の下を流れる笛吹川で米をといでいる最後の場面は象徴的である。川底に見つけた旗ざし物を拾いあげ、それについていたお屋形様の紋どころを見て、何だか攻め太鼓の音が聞こえて来そうで思わず川下へ投げ捨てるのである。

行け行けと家の者がすすめて行つた孝助やんは帰つて来て、よせよせと止めた俺家では誰も帰つて来ないのである。口惜しくなつて顔を上げた。  
橋の上を睨みつけて、

「あのうちの息子じゃ、帰つて来ても親を追い出すぐれえが関の山だ」

と、でかい声で云つた。下をむいたが、また上をむいて、

「ボコなど、もつても、もたなくとも同じことだぞ」

と怒鳴つた。思わずそう云つてしまつて、目の前に惣蔵の顔がちらついた。（先祖代々お屋形様のおかげだ）と、あんなことは、嫁の奴が云い出したのに違いないのである。あんな嫁をもらつて（えらい災難だ）と思うが、諦めきれなかつた。黙つて米をといでいると、橋の上から、

「そんなところで米をといで、すぐ川かみにや人が死んでるぞ」

と云われた。定平は下をむいたまま（ふん）と思った。川を眺めながら、

「三寸流れれば、お水神さんが清めるぞ」

と、口の中でブツブツ云つた。——中略——

川から笊ざるを上げようとしたら、川の底に旗ざしものが長く延びているのである。思わず手を突っ込んでひきずり出した。濡れ髪のようなお屋形様の紋どころが黒く絡みついてきた。攻め太鼓の音が聞えて来るようで、あわてて、バサッとまた川しもへ投げ込んだ。

この中に出て来る「惣蔵」は、定平の長男である。定平の言うことを聞かず戦さに出かけ、手

柄をたて、「男兄弟はみんな、去年三河の長篠の合戦で討死して身寄りのない娘」を嫁にして、土屋惣蔵と名のる大将になっているのである。

この惣蔵が定平一家を戦さに巻き込んだ張本人なのだが、勝頼の時代になつて敗け戦さとなり、「いくさはどんなことになるか、今のうちに家へ帰らなきや」と、家に連れて帰るべく迎えに行つた母親のおけいに向かつて、次のように言うのである。

お屋形様のお供をして行くさ。先祖代々お屋形様のおけいになつて、みんなお屋形様に背く奴ばかりだ、お屋形様は泣いてるぞ、行ってみろ、安蔵も平吉も行くと云うのでお屋形様は嬉しくて泣いてるぞ。

そして結局、弟の安蔵、平吉、妹のウメ、母親のおけいのすべてを武田家の滅亡劇に巻き込んでしまうのである。

惣蔵は以前にも、早く家に帰つて来るよう説得する定平とおけいに向かつて、「先祖代々お屋形様の世話になつて」と、この言葉を投げつけているのであるが、定平やおけいにすれば、「お屋形様に先祖代々恨みはあつても恩はないのである。先祖のおじいは殺されたし、女親のミツ一家は皆殺しのようにされてしまい、ノオテンキの半蔵もお屋形様に殺されたようなものであ

る。八代の虎吉もお屋形様に殺されてしまったと同じであるのに、先祖代々お屋形様のお世話をなったと云い出したのであるから惣藏は氣でも違つたのではないかと思つた」ほどなのである。

百姓でありますながら武士階級へ組みし、意識までも支配階級化して行く惣藏のこの言葉には、第一次世界大戦中になされた「天皇陛下の御為に」とか「お国のために」「いやしくも日本人なら」、果ては「國賊」「賣國奴」という言い方に共通するものがある。举国一致という旗印の下にすべての庶民が狩り出され、そこから兵士という名の足軽侍と一握りの高級武士が誕生し、戦争へ戦争へと突っ走つて行つた当時が、この「笛吹川」の滅亡へ滅亡へと突っ走つて行く突っ走り方と重ね合わされているのである。(この惣藏の姿は、本来庶民であるはずの多くの者がエリート志向で、競争社会を生き抜きあわよくば支配階級化＝武士化しようとしている今日の姿もある。それへの深沢の批判である。)

そして、この突っ走り方、即ち時代の流れ、展開の急激さが、この作品の特徴でもあるのである。

よく指摘されるように、この作品では次から次へと人が生まれ、一方では次から次にコロリコロリと人が死んで行くのである。この程度の長さの作品で、登場人物が五、六世代に渡るというのも珍しいのではないか。ある評論家がパノラマを見るようだと言つてゐるが、まさに人生の人間の歴史のパノラマを見せられるかのようである。

このような形で人間の歴史を見せられると、或る時代というのはこうした歴史の中のほんの短い一コマに過ぎなく、人間はいつの時代にも闘争を繰り返しながら、連綿として生き死にを続けて来たのだ、と改めて思い知らされるのである。

人は日頃、自分たちを中心にして物を見、考へてゐる。つまり、歴史の最先端にあるという、いうなれば自分たちの時間がいつまでも続いて行くのだという感覚で過してゐるわけである。

しかし、「笛吹川」のように、幾世代もの人間が次々と現れては消え、消えては現れるという作品を見せられると、人間といふものを、急激に流れる時間の中の、ほんの一瞬の存在としてリアルに意識させられるのである。それは決して感傷的なものではない。もっと凄じい、人間がどう言おうと何をしようとも全くおかまいなしに、死という形で次から次へと清掃するかのように片づけて行く力、人間を超えた力を感じさせるのである。平たく言えば、自然の力である。そして、我々自身も、そういう生まれては消え、消えては生まれて連綿と悲喜劇を繰り返して行く存在の一つに過ぎないのだという……。

従つて、ある意味では、人間が集団として、あるいは集団の中で、何をし、何を考えようと、人間の存在は同じく生き死にを繰り返して行く他の動物や植物の存在と何ら変わらないのだということにもなるのである。そうした存在として人間を見ようとする深沢の目が感じられるのである。

深沢は、

「或る時、私は地面を這つてゐる蟻を見て、『ハハア、人間も、こんなふうに地球の上を這いまわっているのだナ』と思った」と述べている。

地球の上を這いまわっている蟻のような存在として人間をとらえる時、闘争を繰り返している人間の姿が、存在が小さなものとして見えて来るのは必然である。宇宙の一角から地球を見た時、あの球体の表面で互いに殺し合い、原爆や中性子爆弾作りに励んでいる人間の行為がいかに愚かで滑稽であるか、はつきり認識されるのと同じことである。地球上の全存在（全生命）の中の一存在として人間を見た時、その地球を何度も破滅させるような核を作り出し所有している人間が、果たして他の生物よりも重要な意味ある存在と言えるのかどうか。全生命の中でひとり人間だけが逸脱し、優位意識を持ち、そして全生命を破滅へと導こうとしているのではないか。そうした他の生命への優位意識を捨て、同列の存在として自己を顧みた時にこそ、こうした行為の愚かさ潜越さにも思いあたるのではないか。

深沢はまた、次のようにも言う。

屁をひるということは悪事を働いたのではないけれど、下劣な行為のように思われるらしい。が、私はそれ程タイしたことでもないと思っている。屁は生理作用で胎内に発生して放出され

るものだと思う。——中略——人間は誰でも屁と同じように生まれたのだと思う。生れたことなどタイしたことではないと思つてゐる。

従つて死ぬことも生きることも大したことではないと言つうのであるが、ここには優位意識を持つ人間への批判が見られる。

「生れたことなどタイしたことではない」というのは、とりもなおさず、人間の存在は優位意識を持つほど大したものではないのだということである。

そして、人間の存在が大したことではないということは、人間のあいだに大した差はないということでもある。

つまり、人間相互の間に優越意識を持ち込むなど、とんでもないことだということになる。

会社に奉仕するより、自分に奉仕することだね。仕事なんて、その人の人生になんの関係もないよ。あとは考えたいことを考え、したいことをすればいい。エリート・コースを歩きたがる人、立身出世をしたがる人は奇形児だよ。出世欲という欲が異常に強いんだから、まあ一人に一人ぐらい、そんなのいるかね。過去の社会はそういう立身出世型の人間たちをつくることで、オレたちの生活を不幸にしてきたんだからね。

つまり、偉いといわれる人間をつくって、人間の差別をしてきたわけ。そんな人間は、オレたちの敵だね。

エリート、支配者、権力者への痛烈なイロニー（皮肉）である。

ここでいうエリートとは、「笛吹川」で言えばお屋形様であり武将（支配階級及びそれに組みする者）であるが、それは同時に、惣蔵のように「優位化」（エリート化）を求めようとする人間への批判である。この優位化の意識こそ競争と闘争を生み出し、人間を不幸にする根源だとうわけである。これは即ち、社会集団が持つ価値観の完全な否定であり、個体の集団に対する復権の主張でもある。

私は何もかもひとりで考え、私だけの道で好きなことをしていれば楽しいのである。

私は生れたということを屁と同じ作用だときめたが、本当はもつとオカシイことだと思う。そのことを言えば笑ったり、悪いことを言つたように思われたり、そのことを書けば犯罪になることなどもあるのである。

そんな変な作用で私たちは生まれたのだから、生まれたことなどタイしたことではないと思うのである。だから、死んでゆくこともタイしたことではないと思う。

生まれて死んで、その間をすごすこともタイしたことではなかつたのである。

性に対する社会倫理を揶揄<sup>やゆ</sup>し巧みに逆手にとった論理である。

ところで深沢七郎の死生觀は、どうせ死ぬのだから……といったような消極的な、なげやりなものではなく、人間は生物的<sup>せいぶつ的</sup>存在なのだからそれが当たり前であり、自然であり、眞実なのだから、という肯定的な言い方に特徴がある。

例えば「権山節考」におけるおりんの態度である。おりんは自ら進んで死出の途につくのであるが、そこに「村のために」という自己犠牲の意識があつたことは確かだが、それと共に、その死は自然死に近いものとして意識されていたのではないか。この点については既に評論家によつて指摘されていたように思うが、権山詣りは既定の事実であり、七十歳というのはもはや寿命としてとらえられていたはずである。深沢が肯定しているのは、自己犠牲というより、死(寿命)を自然のものとして肯定的に受け入れて行こうとするおりんの態度なのである。

このおりんには、深沢七郎が三十五歳の時に肝臓ガンで亡くなつた実母の姿が重ねられているのであるが、深沢は母親からその死の二週間前に「もし、わしが変つた姿になつても、それは悲しいことではないよ」と言つて聞かされるのである。

母は彼岸の入りの日に——死ぬ十五、六日前で「もし、わしが変った姿になつても、それは悲しいことではないよ」と私は言われたのである。私はそのことを三年も前から予期していたのだ。「もう三年しか」と思っていた私のカンは当つたのだ。だが、私もそれは言わなかつたし、母も言わなかつた。そうして、それは口では言わなかつたが、行動では互に現れてしまつたのである。隠しているけど互にすきだらけだったのである。そうして、その秘密を母は口に出してしまつたのである。

その時、私は「そんなことはないから」などという当たり前な、平凡な答しか出来なかつたのだった。私の言つたことは、みんな下手な答ばかりしか出来なかつたのである。情けないことだと思う。

ここには、こうした母の、死を自然のものとして受け入れようとする姿勢を肯定するとともに、人間の死を極く自然のものとして認識し、肯定し切ることによって母親の死を自分に納得させようとする深沢の気持ちが読み取れる。深沢は、人間が死ぬのは良いことだとか、自然淘汰だなどと言つてはいるが、その根底にはそうした深い哀しみと諦めがあるようである。

事実、当時故郷の石和（山梨県）に住んでいた深沢は、母親の死とともに石和を去り、放浪の旅に出てるのである。文字通り「死んで行くこともタイしたことではない」のなら、母親の死

にも心が動かず、放浪の旅に出ることもなかつたのである。

生まれることも死ぬことも、生きていることも大したことではないという深沢である。それをなまじつか、生きていることを何か大層な、何か生きている意味を見出さなくてはならないようなものとして考えたり、あるいは後世に残るようなことをしなければ人間でないよう、そんな考え方や価値観を持つから人間は不幸になるのだ、と彼は言うのである。

こうした死生観に立つ深沢七郎の人生観は、従つて次のような言葉に集約されてくる。

いつだつたか人生相談で、大学に入つて教養を身につけて本物になりたいなんて、あきれたことをいつてきた人がいたけど、人間に本物なんてありやしないよ。人間は欲だけある動物なんだからね。——中略——

生きることは悲しいことだとか、生きることは楽しいことだとか思う必要なんかないよ。豊臣秀吉だって徳川家康だって、大きなことをしようとした人たちだって、結局なんのためにそんな努力をしたかわからないと思うよ。

生きるに値する何かを発見するなんて思い違いをしないで、とにかく漠然と生きることだね。何かしようなんて思うヤツは、ひねくれ者か、人生からはみだしたヤツだよ。

川の水が流れていくように、何も考えず、何もしないで生きることこそ、人間の生き方だと

思うね。

虫や植物が生きていることとおんなじようにね。

それで自分自身に満足があればそれでいいわけ。生きてることが青春なんだよ。

かなり極端化した言い方ではあるが、深沢は、社会集団の価値観を否定し、個体の復権を主張し、人間はできるだけいらぬしがらみを捨てて、自由に、好きなように生きるべきだと言っているのである。自然に、あるがままにである。

確かに深沢七郎の言葉には社会集団のもたらすプラス面への言及がなく、それとマイナス面とのかねあいの問題が欠落しているのであるが、小学生の自殺、中学生の校内暴力、高校生の家庭内暴力、そして一連の異様な通り魔殺人事件等を生み出している今日の社会、そうした競争社会に生きる我々としては、深沢七郎の無定着の思想ともいうべき観点から、人間を、社会を、そして日頃何の疑問も抱かずに有している社会的価値観を問い合わせてみると、あながち無駄ではないよう思うのである。

註 「『はしか』にかかることによってはじめて子供は大人になる」（近代文学 昭和三十三年七月号）の中で、江藤淳は次のように述べている。

「お屋形様」もまた、個々の人格としてではなく、日常的に存在しながら、実は無限に遠い所にいる象徴的な存在としてのみとらえられる。それはほとんど権力というよりは『自然』であって、そこからあたかも天災のように、無難作な死がもたらされ、循環的にくり返される装飾的なアクションとともに、この物語ののっぺりした現実にリズムをあたえている。」

〔参考文献〕

- ※ 別冊新評「深沢七郎の世界」（四十九年七月・新評社）
- ※ 日本文学研究資料叢書「井伏鱒二・深沢七郎」（五十二年十一月・有精堂）
- ※ 「深沢七郎と五木寛之」（国文学 五十一年六月臨時増刊号）
- 文庫本となつた作品に、「楳山節考」「東北の神武たち」「笛吹川」「人間滅亡の唄」（以上新潮文庫）「甲州子守唄」（講談社文庫）その他がある。